美　術　科

美術科を通して育成する「自立した学習者」

生活や社会の中の美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力

- よりよい美術表現を創意工夫する力
- 多様な考え・表現を吸収し、自分にとっての美術の価値を深める力
- 生活や社会の中の美術、美術文化と豊かに関わる力

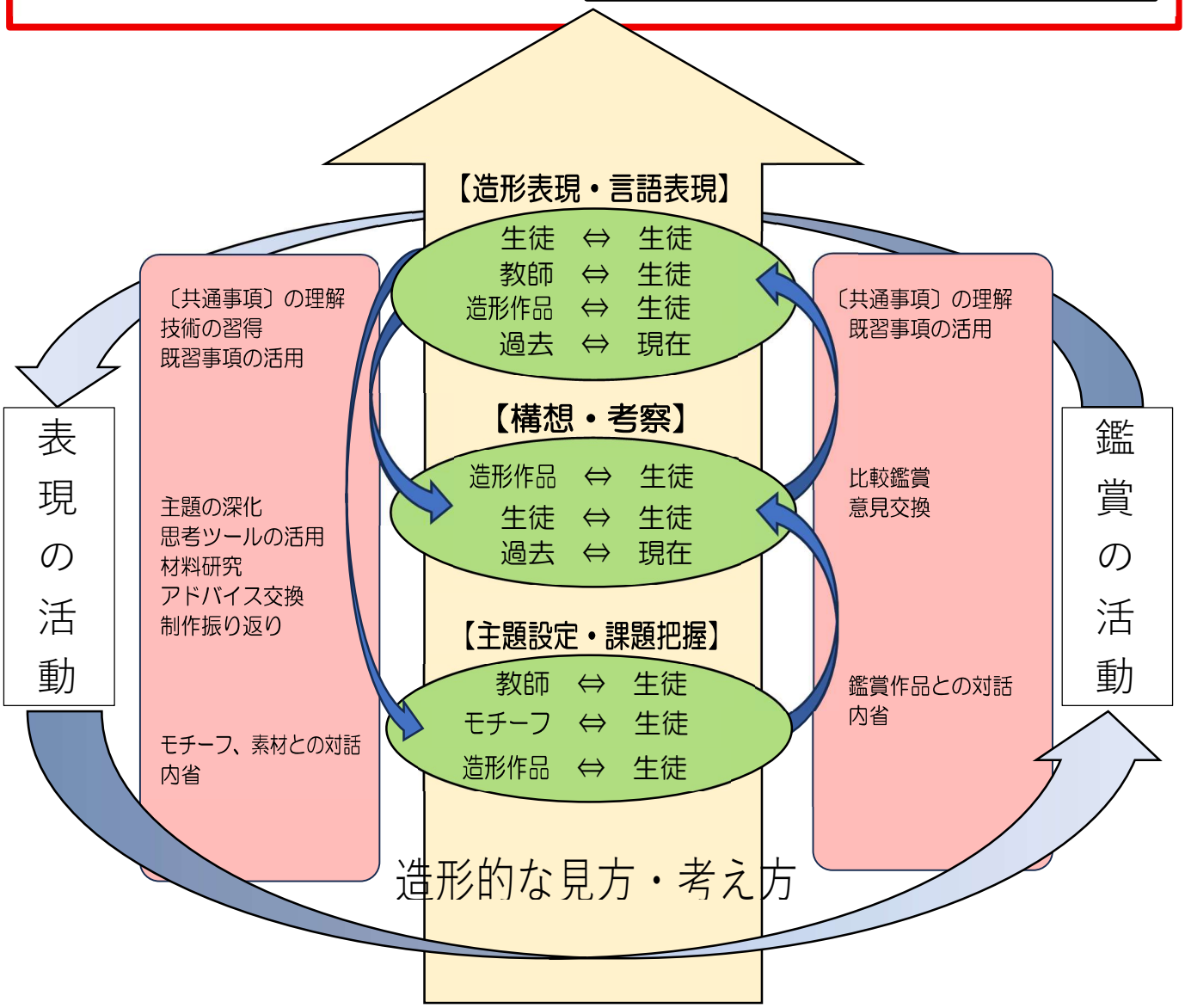
中学校３年間で目指す「自立した学習者の姿」

＜美術科として＞
生活や社会の中の美術、美術文化と豊かに関わるための工夫ができる。

＜他へ応用＞
多様な考えを取り入れつつも、自分の価値観をもち、自己実現（社会貢献）のために試行錯誤し、適切な方法を選択できる。

＜表現の活動＞
自分で主題を生み出すことができ、主題に合った表現方法を試行錯誤し、選択できる。

＜鑑賞の活動＞
多様な考えを取り入れ、視野を広げつつも、美術的に自分なりの考えを形成でき、実生活にあるものを美術的に捉えることができる。



１　題材名

第２学年　後世に伝える美

曹源寺阿弥陀如来坐像の保存修復を考える

【Ｂ鑑賞　（１）イ（イ）】

〔共通事項〕　（１）ア、イ

２　本校の研究と本実践の関わり

多様な造形表現や美術的価値に触れつつ、それらを〔共通事項〕を基に解釈し、個人の感性を働かせながら、自分のものとすることで、美術科の「自立した学習者」に近づくことができる。その程度は、いかに多くの表現方法(造形表現、言語表現)をもち得ているか、多くの美術的価値に触れ、いかに深く内省できたかで大きく異なる。他からの吸収と個人の内省が重要な美術の活動において、「学びの往来」は不可欠なものといえる。個人と他者、過去の自分と今の自分の「学びの往来」が自然と生まれ、「自立した学習者」に近づけるように、本実践では、多様な価値観が生まれるような作品を取り上げ、複数の視点を提示するなどの工夫を凝らした。

３　実践

本校の２年生は修学旅行にて、石川県の能登地方と金沢市を訪れ、震災復興・地域参画・伝統文化について学んだ。修学旅行を通して得た学びをきっかけとし、美術文化の継承に対する個人の考えを深めるため、本題材を設定した。授業で取り上げた木造阿弥陀如来坐像は、珠洲市にある曹源寺の所蔵である。一昨年の能登半島地震によって本堂が倒壊し、文化財レスキューされた如来像の手や脚部は体部から外れ、体全体は色褪せてしまった。本来であれば、体全体に施された黒漆で黒光りし、鮮やかな彩色や截金が施された蓮華座に座した姿である。応急的な処置が施されているものの、震災から２年が経った現在でも、今後の修復の見通しは立っていない。

生徒は修学旅行のフィールドワークにて、珠洲市の惨状を目の当たりにしている。地震被害の甚大さを追体験した上で、被災前後の仏像を比較鑑賞することで、生徒はより深く、地域の文化財保存の意義を考えることができると考えた。日常生活において、文化財を身近に意識することは少なく、文化財を保存修復し、後世に伝えていくことの意義を考える機会はほぼない。文化財はその地域に根差したものであり、制作した人、文化財を守り伝えてきた人等、多くの先人たちの思いが込められている。文化財を通して、先人たちの思いに触れることは、心豊かに美術文化に関わる資質・能力を育成する上で大切なことだろうと考える。

⑴　題材の目標

○仏像の形や色彩、材料等の性質や、それらが感情にもたらす効果、造形的な特徴等を基に、全体のイメージや作風で捉えることを理解することができる。

【知識･技能】

◎受け継がれてきた表現の特質等から仏像の造形的なよさや美しさを感じ取り、後世に文化財をどのように残していくのかについて考えることを通して、美術文化に対する見方や感じ方を深めることができる。

【思考・判断・表現】

○主体的に仏像の造形的なよさや美しさを感じ取るとともに、後世に文化財を残していくことの意義について深く考えようとしている。

【主体的に学習に取り組む態度】

評価規準(ルーブリック)

	A	B	C
①〔共通事項〕を基に阿弥陀如来像の造形的な魅力を感じ取ることができる。 ②造形的な特徴が与えるイメージと「彫刻作品としての姿」、「信仰対象としての姿」、「文化財としての姿」を関連付けて、仏像の造形に込められた思いを考察することができる。 ③文化財継承の意義について造形的に考察することができる。	【A+】 ①～③ができている。 ※「彫刻作品としての姿」、「信仰対象としての姿」をふまえた上で、「文化財としての姿」をとらえている。 【A】 ①と②ができている。	【B】 ①と②ができているが、一つの姿にしか注目できていない。 【B-】 ①のみできている。	①～③いずれもできていない。

⑵　全体計画

学習活動
第１次
・仏像の彫刻作品としてのよさや美しさを感じ取る。 （曹源寺阿弥陀如来坐像の鑑賞） Ｑ１．震災後と震災前、それぞれの仏像の姿からどのような印象を受けるだろうか？　造形的な見方・考え方
・信仰対象としての仏像表現（造形の形式）について学ぶ。 Ｑ２．なぜ、仏像には普通の人間にはない特徴が見られるのだろうか？ Ｑ３．なぜ、さまざまな表情の仏像がいるのだろうか？ Ｑ４．仏像の手のポーズには、どのような意味があるのだろうか？ ・仏像造形の形式を参考にしながら、曹源寺如来像の造形に込められた人々の思いを考える。 Ｑ５．曹源寺の仏像の造形には、どのような思い（願い）が込められているのだろうか？　造形的な見方・考え方

第２次
・興福寺阿修羅像の三つの姿（明治期の修復前の姿、現在見ることのできる姿、復元像）の印象の違いを捉える。 Ｑ１．三つの阿修羅像の印象の違いを感じ取ろう。造形的な見方・考え方 ・保存修復を考えるときの視点について理解を深める。 Ｑ２．あなたが明治期の修復に携わったのならば、どのような形で後世に阿修羅像を残しましたか？　造形的な見方・考え方
第３次
・曹源寺の如来像を後世にどのような姿で伝えていくべきなのかをグループで議論する。 Ｑ１．あなたが修復師ならば、どのような姿で曹源寺の仏像を後世に残したいですか？　造形的な見方・考え方 Ｑ２．文化財を守り、後世に伝えていくことの意義は何だろうか？

⑶　本実践における「自立した学習者」及び「学びの往来」

本実践では、仏像の造形に込められた思いや文化財を継承する意義を考察する過程において、自分に足りない視点を積極的に取り入れ、〔共通事項〕を基にしながら、自分の考えを深めている生徒を「自立した学習者」とした。仏像は彫刻作品、信仰対象、文化財と、さまざまな姿で捉えることができる。仏像を単に一つの美術作品として捉えるのではなく、歴史や文化の広い枠組みの中で捉えることで、美術文化の継承についての理解が深まるはずである。考えの根拠を小グループで共有したり、過去の自分の考えを分析し、考察し直したりする活動に取り組ませることで、本題材で設定した「自立した学習者」像に迫ることができると考えた。いかに生徒の視野を広げさせ、吸収したものを基に、仏像の造形を再解釈させるかが、この題材において重要になってくる。そこで、以下のように「学びの往来」の場面を設定した。

＜個人（過去）⇔個人（現在）＞

第１次：導入時に捉えた阿弥陀如来坐像の印象と、この時間で学んだ仏像の形式を踏まえて、仏像の造形に込められた思いを考察し、ワークシートにまとめさせる。

第３次：「文化財としての姿」、「信仰対象としての姿」、「彫刻作品としての姿」に関する部分をそれぞれ異なる色のマーカーで印を付け、不足している視点を認識させる。阿弥陀如来坐像の修復について、第１次と第３次の考えを比較しながら、阿弥陀如来坐像の修復について再考察させた上で、文化財継承の意義について自分の考えをワークシートにまとめさせる。

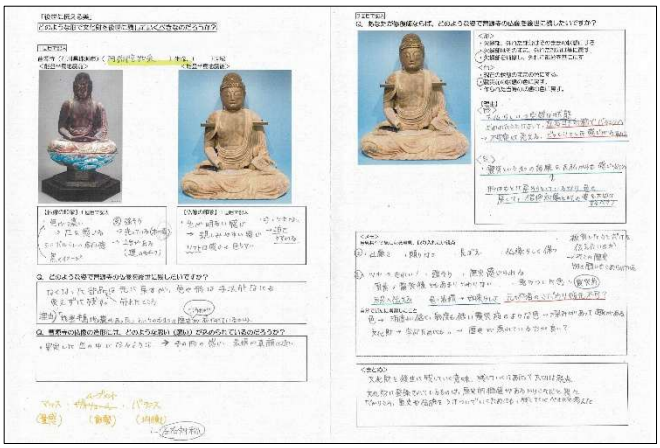
＜個人⇔小グループ＞

第２次：阿修羅像の修復について同じ考えの者同士で集まり、修復の根拠とした考えを共有させることで、修復の方法が同じであっても根拠となる考えが多様であることに気付かせる。

第３次：第２次同様、同じ考えの者同士で意見を共有し、視野を広げさせた後、阿弥陀如来坐像の修復について異なる立場の者同士のグループで集まり、どのようなことに注目して修復方法を選択したのかを共有させることで、自分に不足していた見方に気付かせる。

※彫刻制作（１年生）での学びを生かして、仏像表現の魅力を考えることを意図しているが、本実践では表現と鑑賞の「学びの往来」は設定していない。

ワークシート（上：第１・３次、下：第２次）



４　成果と課題

視点①　「学びの往来」を実現する単元構成

＜成果＞

実践では、第１次での生徒の意見を踏まえて、授業者が彫刻作品、信仰対象、文化財の三つの姿に整理し、仏像を捉える視点として生徒に提示した。これら三つの姿は生徒の意見を基にしているため、生徒はすぐに受け入れ、授業全体で意識していたように思われる。三つの姿を意識し、仏像の造形を捉えるように促したことで、生徒の中にさまざまな価値観が生じた。そのため、生徒は他者の考えも聞いてみたいと自然と思うようになり、他者と個人の「学びの往来」を生み出すことができた。

第１次では、曹源寺阿弥陀如来坐像の被災前後の姿を比較鑑賞し、造形的な特徴を分析させた。色の変化が顕著なため、色から受ける印象を述べる生徒が多くいた。被災前の色を「肌の黒色から威厳を感じる」と考えた生徒もいたが、多くの生徒は明度の低い色を怖いと感じ、明度の高い色になった被災後の姿を「仏らしい優しさ」を感じるとして、被災後の方を肯定的に捉えていた。一方、被災後の形については、欠損箇所が多くあることから痛々しいと感じている生徒が多く、被災後よりも前の姿を肯定的に捉えていた。仏像の造形の形式についての知識がまだ定着しておらず、仏像鑑賞に慣れていないこともあり、第１次では個人の好みによって、被災前後の姿の良し悪しを考える傾向が見られた。

第２次では、生徒の視野を広げるため、文化財を考える上で参考になる資料が豊富である、興福寺阿修羅像の鑑賞を行った。興福寺阿修羅像は、奈良時代（制作当時）から伝わってきた姿ではない点、元の姿が鮮やかな朱色だったと考えられる点など、生徒の思考を刺激する材料が多い。第２次ではまず、明治の修復前の姿、現在の姿、作られた当時の姿（復元像）の印象を分析した。第１次では、造形的な視点が抜けやすい生徒がいたため、造形的な特徴から受ける印象を意識させ、部分と全体を交互に見るように促した。生徒から出た意見は以下の通りである。

第２次　Ｑ１に対する生徒の考え

＜修復前の姿＞
・シンメトリーではないので、バランスが悪い。
・腕が無いので、弱そう。

＜現在の姿＞
・シンメトリーだから、バランスがいい。
・復元像よりも凹凸がはっきりして見えるから、表情にメリハリがある。
・明度や彩度が低い色だから、落ち着きがある。歴史が感じられる。
・体全体が暗いから、金色の装飾が目立って見える。

＜復元像＞
・赤いから強そう。戦いの神らしい。
・彩度が高く、華やか。
・鮮やかな色だから、日本らしくない。異国風。
・べた塗りな感じがして、のっぺりしている。

三つの姿のうち、どの姿が一番美しいと感じるかを尋ねると、現在の姿を美しいと感じる生徒が圧倒的に多く、復元像を美しいと感じる生徒は数人だった。また、明治の修復前を美しいと感じる生徒はいなかった。「日本美術＝落ち着きがある」、「落ち着きは、明度や彩度が低い色によって生み出される」と考える生徒が大多数であり、生徒の価値観では、復元像の色は不自然だったようである。

それぞれの姿を分析した後、自分が明治期の修復師だとすると、どのような姿で阿修羅像を後世に残していきたいかを考えさせた。どのような処置を施すかということよりも、彫刻作品、信仰対象、文化財としての姿を意識しながら理由を深めるように促した。生徒から出た意見は以下の通りである。

＜Ａ何も処置を施さない＞
・腕が欠損し、色褪せている状態の方が、戦いの神としての誇り高さや歴史的な強さを感じられる。
（ヒンドゥー教において、阿修羅が戦闘神であったことを調べた上での意見。阿修羅等の天部は、ヒンドゥー教の神が仏教に取り入れられたことは、第１次で授業者から全体に伝えている。）

・腕が欠損していることは、長い年月を経てきたということを示しているから、無いままでも問題ない。欠損している腕は、怪我をしながらも、信者と共に戦ってきた（困難を乗り越えてきた）ということを表しているようにも感じる。

・信仰対象に手を加えるのは、よくないことだと思う。

形を変えることができても、作者の思いを同じように込めることはできない。風化して色が褪せていったことも、仏像が経てきた歴史の一部。

＜B 欠損した腕を復元する＞
・腕があると安定感が出て、強そうに感じる。

・腕が揃っている完全な状態でないと、拝みたいという気持ちにならない。鮮やかな色に戻してしまうと、歴史が感じられなくなってしまう。

・腕は阿修羅の象徴である部分だと思うから、腕は付けるべき。色褪せている状態の方が歴史を感じる。

・仏像が経てきた歴史や阿修羅像の強さを表すには、腕があった方がいい。また、くすんだ色の方が厳格さを感じる。

＜C 欠損した腕を復元し、作られた当時の色に戻す＞
・すべての腕があることで安定感が生まれているため、腕はあるべき。鮮やかな色の方が戦闘神らしい強い印象を与えることができる。本来の神としての姿が後世に残ってほしい。

※「彫刻作品」としての姿、「信仰対象」としての姿、「文化財」としての姿

個人の「美しさ」の価値観で見ると、現在の姿（腕が修復され、色褪せた状態）を肯定的に捉える生徒がほとんどであったが、信仰対象や文化財としての姿を意識すると、「美しさ」のみに注目していたときと異なる姿をよしとする生徒も出てきた。

個人の考えを深めることができるよう、残したい姿が共通の生徒、異なる生徒同士で集まり、意見共有する時間を設けた。生徒は異なる価値観に触れたことで、作られた当時の美意識と現代の美意識が異なること、信仰対象や文化財としての理想像が必ずしも彫刻作品の美しさと合致するわけではないことに気付くことができた。授業後の感想の中には、「友達の意見を聞いて、どのような姿で残していくべきなのか、ますます分からなくなった」という意見が見られた。

授業の終末には、さらに生徒の考えに揺さぶりをかけるため、完全な姿でない状態で後世に伝わっている仏像として、興福寺五部浄像（胸部から上のみ残存）、松尾寺焼損仏立像（胴体部分のみ残存）を紹介した。すべてが揃った完璧な形でなければならないと無意識に感じていた生徒たちにとって、これらの仏像は衝撃的だったようで、驚きの表情を見せた生徒が多くいた。

第３次では、既習事項を基に曹源寺の如来像の残すべき姿を再度考えさせ、ワークシートに記入させた。第２次同様、彫刻作品、信仰対象、文化財としての姿を意識しながら、理由を深めるように促した。視野の広さや考えの深さは、生徒によって異なるため、第２次同様、少しでも多くの生徒が広い視野をもち、考えを深めることができるよう、残したい姿が共通の生徒、異なる生徒同士で集まり、意見共有する場を設定した。生徒から出た意見は以下の通りである。

第３次　Q１に対する生徒の考え

・人々の心の拠り所となる仏像だから、頼りがいのある姿であってほしい。欠損がない方が頼りがいのある姿に感じる。

・仏像の荘厳さを保つためには、形がしっかりと整っていないといけないと思った。仏像には、震災があったということを後世に伝える役割もある。色によって、それ（震災があったこと）を伝えられると思う。

・元の姿も美しいけれども、被災後の破損した姿にも違った美しさがあるし、歴史を経てきたということも伝わるので、元の姿とは違った価値があるのかと思った。

・信仰対象として見るならば、仏像らしい安定した状態の方がいい。破損した状態のままだと、左右非対称でバランスが悪く、どっしりとした感じがない。色は、震災前の明度、彩度が低い色の方が趣を感じるけれども、震災後の色であれば、震災があったという歴史を感じることができる。

※「彫刻作品」としての姿、「信仰対象」としての姿、「文化財」としての姿

生徒のやり取りの中で興味深かったのは、被災したという事実を如来像で伝えていくべきなのか否かを議論していた点である。破損した状態で残すと考えた生徒の多くは、被災したという事実も仏像が経てきた歴史の一部であり、破損した状態を残すことで、歴史を伝えるという文化財としての役割を果たせると考えていた。一方、形を被災前の状態に戻すべきだと考えた生徒の多くは、信仰対象としての姿を強く意識しており、信者にとって完全な姿である仏が理想的だと考えていた。特に欠損した手に注目した生徒が複数名おり、「仏様のメッセージを伝えるために印相は大事である」、「人々を救う存在である如来に救うための手がないと困る」といった意見が聞かれた。

破損した状態で残すと考えた生徒の中は、被災前の状態に戻すと考えた生徒の意見を聞き、色によってのみ、被災したという歴史を伝えればよいと、考えを改める者もいた。色については多くの生徒が褪せた色の方を肯定的に捉えていたため、ほぼ全員がこの考えに納得していた。しかし、この考えに納得できない生徒も一部おり、信仰対象や文化財としても考えた上で、仏像を彫刻作品として捉え直し、以下のような考えを述べていた。

・第三者が手を加えて元の形に戻したとしても、作者が仏像に込めた思いまで復元することは不可能である。作者の思いを尊重するならば、破損した状態が作者の本意でなかったとしても、第三者が手を加えるべきではない。

・完全な状態を美しいと考える人が多いが、失われているからこその美しさもあるのではないか。

このような意見は、第１次では聞かれなかったため、３時間の学習を経て、生徒なりに文化財に対する考えを深めていたのではないかと思われる。

第３次意見共有の様子

＜課題＞

鑑賞の活動は、表現の活動よりも授業者主導になりがちであり、生徒の力だけで深い考察に辿り着くことは難しい。特に初めて触れる美術表現の鑑賞だと、尚更である。どの時点で展開を生徒に委ね、自分の視点で考えを深めさせるのか、検討を重ねていかねばならないだろう。

ある程度さまざまな美術作品を鑑賞してきた２年生の生徒であっても、自力で作品の造形的な魅力を考察することは困難だった。第１次では、これまで鑑賞してきた造形作品と同様に「造形的な見方・考え方」を働かせながら、曹源寺阿弥陀如来坐像の造形的な魅力を探ることが可能だと考えていた。しかし、仏像という特殊な造形作品に抵抗を感じ、全く考察が進まない生徒が予想よりも多くいた。形や色等の造形的な特徴から全体のイメージを感じ取ることは理解していたが、どのように解釈したらよいのか戸惑う生徒が多かったようである。曹源寺の像は、生徒がこれまで鑑賞してきた人物表現に比べ、表情が読み取りづらく、造形的な特徴と全体のイメージを結びつけにくかったのかもしれない。生徒の大半が知っている有名な仏像（奈良大仏、高岡大仏、阿修羅像等）を取り上げてクイズを行ったりしながら、仏像造形の形式を授業者から伝えると、仏像表現に抵抗を感じていた生徒も、他の造形作品と同様に造形的ない魅力を考えることができるようになった。これまでの経験（美術の鑑賞経験だけでなく、日常的な視覚経験を含む）を基に生徒自身の力で解釈しやすい作品と、仏像のように解釈しにくい作品とがある。解釈の糸口を示せば、どのような表現であっても、何らかのイメージを造形的な特徴から感じ取ることは可能だろう。今回の実践であれば、表情が読み取りやすい仏像や西洋の人物彫刻等と比較させたり、目や口等の部分の表現に注目させたりすればよかったかもしれない。

最終的に自分なりの価値観を形成する美術科において、生徒同士の「学びの往来」の後、再度、造形作品（表現活動の場合は対象）と向き合い、過去の自分の考えと照らし合わせながら、考えを深めていく必要がある。限られた時間の中であっても、このような時間はしっかりと確保できるよう、授業全体の構成を工夫していきたい。

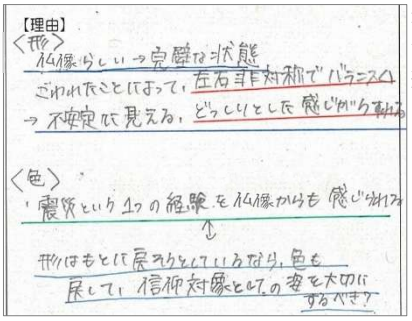
視点②　「自立した学習者」育成に必要な資質・能力を身に付けるための自己調整学習

＜成果＞

ワークシートの記述にマーカーを付け、自分の考えの傾向を客観視した上で、意見共有をさせたことで、自分の関心に合わせて、友達と意見共有することができ、いつもよりも生き生きと活動している生徒が多くいた。「自立した学習者」にまでは至らないが、自分の考えの深まり具合に応じて、足りない視点を取り入れることはできていたと思われる。

第３次 ワークシートの記述にマーカーをしている様子

ワークシートのマーカーの例



赤色：彫刻作品としての姿
青色：信仰対象としての姿
緑色：文化財としての姿

共有によって足りない視点を取り入れた生徒の記述例

＜共有前の記述＞
信仰対象として、今のままでは頼りない感じがする。彫刻作品としても、今のままでは美しいと言えない。

＜意見共有で気になる意見、取り入れたい視点＞
生徒のメモ
- 形から荘厳さは×
- 昔から伝わってきたもの→神々しさ
- 左右対称でないと、不安定さが生まれる
  左右対称→安心感
- 当時の状態まで戻すと、文化財として現在までの歴史が感じられない。

＜共有後の記述＞
１年生のころに美術で（学習）したアンバランスだと、不安な感じを与えるということからも、信仰対象としてということからも、直した（欠損部を補修し、外れた部分を基に戻す）方がよいと考えた。色も震災前の方が時代を感じられるし、威厳を感じられる。

共有前の記述は具体的な根拠に欠けていたが、意見共有によって既習事項を思い出し、造形的な根拠をもって、自分の考えを表現できるようになっている（下線部）。

第３次　Ｑ２に対する生徒の考え及び授業後の感想

・文化財を保存するということは、作られた当時の技法や込められた思いと共に、そのものを残してきた歴史を感じるようにすることだと思う。

・仏像は初めから文化財として作られたものではなく、信仰対象として作られたものなので、誰のために作られたものなのかを考えることが一番大切だと思った。

・仏像の作者の思いや仏像が歩んできた歴史からも考えることで、より深く仏像に入り込めるのだと思う。

・被災したということが歴史的な価値として見る面もあると思う。しかし、その前まで形を維持してきたという価値もあると思う。彫刻作品としての魅力をもちながら、長年守ってきたことに意味があるなら、その思いのバランスが取れるように、後世に残していくべきだと思った。そして、そのものの魅力を無くさないようにすることが何よりも大切だと考えた。

・文化財は古くからあるものだからこそ、意味があるのだと思う。昔作られたものに込められた思いを、今でも文化財から受け取ることができるし、逆に昔と今の思いの違いを文化財から学ぶことができる。新しく作られた、傷がなく、色塗りもきれいな文化財も美術作品として好きだけれど、昔につくられたものも違う良さがあると思う。昔作られたものならではの(文化財をつくる)方法や、年月が経って色ムラが出ているような様子は、今では表すことができず、文化財の強さが増していると感じた。人々を惹きつける仏像の魅力も、美術作品として残していく意味と似ており、今では表せないことが一番の魅力だと思う。

＜課題＞

美術科における「自立した学習者」には、自分の考えを深める力が不可欠である。そして、美術的に考察を深めるためには、〔共通事項〕の理解及び活用が重要になる。しかし、本題材では仏像表現に対して直感的に捉える生徒が多く、〔共通事項〕を基に自分の考えを形成できた生徒は一部に限られた。また、被災仏を取り上げたこともあってか、造形的な考察から逸れた記述も見られた。

第３次　Ｑ１に対する生徒の考え

〈直感的に捉えていると思われる生徒の意見〉
（例１）人々の心の拠り所となる仏像だから、頼りがいのある姿であってほしい。欠損がない方が頼りがいのある姿に感じる。

→　個人の願望に近い意見である。なぜ欠損がない方が頼りがいのある姿に感じるのか、造形的な考察が不十分。

（例２）仏像の荘厳さを保つためには、形がしっかりと整っていないといけないと思った。

→　荘厳さと形のイメージを関連付けている。しかし、個人的な価値判断で、作品の良し悪しを決めているとも捉えられる意見で、評価が難しい。

（例３）完全な状態を美しいと考える人が多いが、失われているからこその美しさもあるのではないか。

→　面白い見方をしているが、「不完全な美」を具体的に自分の言葉で表現することができていない。

〈〔共通事項〕を意識している生徒の意見〉

（例４）信仰対象として見るならば、仏像らしい安定した状態の方がいい。破損した状態のままだと、左右非対称でバランスが悪く、どっしりとした感じがない。色は、震災前の明度、彩度が低い色の方が趣を感じるけれども、震災後の色であれば、震災があったという歴史を感じることができる。

→　仏像の三つの姿を満遍なく意識しつつ、〔共通事項〕を意識して考察しようとしていることが、「対称」「バランス」「明度、彩度」という言葉を用いて自分の考えを述べているところから窺える。

〈造形的な考察が不十分な生徒の意見〉

（例５）第三者が手を加えて元の形に戻したとしても、作者が仏像に込めた思いまで復元することは不可能である。作者の思いを尊重するならば、破損した状態が作者の本意でなかったとしても、第三者が手を加えるべきではない。

→　造形的というよりも倫理的な考えである。

（例６）元の姿も美しいけれども、被災後の破損した姿にも違った美しさがあるし、歴史を経てきたということも伝わるので、元の姿とは違った価値があるのかと思った。

→　「美しさ」というキーワードはあるが、造形的な考察はできていない。歴史資料としての価値を主として考えていると思われる。

直感的に捉えた意見の多くは、造形的な考察が不十分ではあるが、造形的な特徴に注目しようとはしており、〔共通事項〕を基に自分の考えを再解釈することができていれば、深い価値を生み出すことができたと思われる。例えば、例１の意見であれば、「頼りがいのあるイメージ」は具体的にどのような形や色から感じるのか、さらに細かく解釈を進めると、造形的な考察が深まっただろう。また、例３の意見であれば、「不完全な美」を構成美の要素（既習事項）の一つであるアンバランスに注目したり、同じように不完全な美を感じさせる他の作品と比較したりすると、感覚的な考えも具体的に表現することができただろう。より深い価値を生み出すためには、部分と全体を交互に見たり、他の表現と比較したりするなどして、どのような見方が足りないのか、生徒自身が気付く必要がある。本実践では、異なる二体の仏像に対して、どのような姿で残していきたいかを考察させたため、それぞれの仏像についての自分の考えを比較する時間を設けてもよかったかもしれない。阿弥陀如来坐像の鑑賞では、前述のように造形的な考察が不十分な意見も見られたのに対し、阿修羅像の鑑賞では、全員が造形的な特徴に基づいて、残すべき姿を考えていたため、この二体の仏像に関する考えを比較することで、〔共通事項〕を基に考えられていないことに気付くことができただろう。

美術的な価値があまり知られていない地方の仏像、さらには被災仏という特殊な仏像の中に美術的な価値を見出す学習は、「自立した学習者」の育成に適切だったと思われるが、授業者の手立てが不十分だった。内省する時間をしっかりと確保するだけでなく、〔共通事項〕に基づいて再解釈する習慣を身に付けられるよう、〔共通事項〕の指導については検討の余地があるだろう。

（授業者：宮田　苑佳）

＜参考文献＞
・東京国立博物館［ほか］編『興福寺創建 1300 年記念　国宝　阿修羅展』2009 年、朝日新聞社
・関橋眞理編『天平の阿修羅再び―仏像修理 40 年・松永忠興の仕事―』2011 年、日刊工業新聞社
・藪内佐斗司『壊れた仏像の声を聴く　文化財の保存と修復』2015 年、KADOKAWA
・多川俊映［ほか］著、興福寺監修『阿修羅像のひみつ』2018 年、朝日新聞出版
・石川県立歴史博物館編『いしかわの霊場　中世の祈りとみほとけ　令和５年度夏季特別展』2023 年、石川県立歴史博物館
・鬼塚玲奈「仏像鑑賞教育方法の体系化の構想」『美術科教育学会誌』38 号、2017 年、167-178

＜謝辞＞
本実践を行うにあたって、石川県立歴史博物館の齋藤仁志様、中井夏帆様に木造阿弥陀如来坐像（曹源寺蔵）に関する情報を多く提供していただきました。ここに心より感謝申し上げます。